



尾崎秀樹

# 大衆文学の歴史

戦後篇

講談社

大衆文学の歴史 下 戦後篇

一九八九年三月十日 第一刷

一九八九年七月十二日 第三刷

著 者 尾崎秀樹

装幀者 安彦勝博

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一

電話東京(〇三) 九四五―二二二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

製函所 岡山紙器所

上・下二巻セット 定価 一〇〇九〇円(本体九七九六円)(分売不可)

©1989 尾崎秀樹 Printed in Japan

審丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。  
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

大衆文学の歴史 下 戦後篇 ■ 目次

大衆文学における「戦後」

10

廃墟から

石坂洋次郎における津軽 石中先生行状記

22

山手樹一郎の明朗もの 夢介千両みやげ・又四郎行状記

29

大佛次郎の視座 婦郷・宗方姉妹

39

今日出海の比島戦記 山中放浪・天皇の帽子

43

村上元三の領域 佐々木小次郎

53

吉川英治と時感 新・平家物語

60

山岡荘八と家康の人間学 徳川家康

68

子母澤寛と父祖の道 勝海舟

70

獅子文六の諷刺 自由学校・娘と私

77

源氏鶏太のユーモア 三等重役

81

菊田一夫と忘却とは…… 君の名は

89

立野信之と昭和史 叛乱・太陽はまた昇る

93

復興期

五味康祐と剣豪小説 喪神・柳生武芸帳

100

川口松太郎と和の宮の悲劇 皇女和の宮

104

井上靖の戦国史情 戦国無頼・風林火山

111

山本周五郎と歴史 樫ノ木は残った・ながい坂

118

戸川幸夫と動物小説 高安犬物語

130

新田次郎と山岳小説 強力伝・八甲田山死の彷徨

136

今東光の年輪 お吟さま・人斬り彦斎

140

柴田錬三郎とニヒル剣士 眠狂四郎

147

五味川純平の昭和史体験 人間の条件

151

原田康子と北辺 挽歌

160

松本清張と黒の意識 点と線

168

南條範夫の歴史無惨 残酷物語

175

水上勉の文学遍路 雁の寺・越前竹人形

179

海音寺潮五郎と史伝 天と地と

189

舟橋聖一と歴史像 太閤秀吉

196

## 隆盛の時代

司馬遼太郎とその史観 竜馬がゆく

206

池波正太郎と真田の命運 真田太平記

213

|             |                  |     |
|-------------|------------------|-----|
| 黒岩重吾と古代史    | 背徳のメス・天の川の太陽     | 216 |
| 伊藤桂一と戦場     | 螢の河・悲しき戦記        | 224 |
| 杉本苑子と戦争体験   | 孤愁の岸・玉川兄弟        | 232 |
| 梶山季之と社会     | 赤いダイヤ・黒の試走車      | 238 |
| 山崎豊子の歩み     | 花のれん・白い巨塔        | 245 |
| 有吉佐和子と三代記   | 紀ノ川・華岡青洲の妻       | 249 |
| 山田風太郎と伝奇ロマン | 山田風太郎忍法全集        | 254 |
| 富島健夫と青春小説   | 雌雄の光景・おさな妻       | 261 |
| 永井路子の歴史認識   | 炎環・王者の妻          | 266 |
| 三浦綾子と「原罪」   | 氷点               | 271 |
| 瀬戸内晴美と近代史   | 美は乱調にあり・余白の春     | 279 |
| 立原正秋と伝統     | 白い罌粟・冬のかたみに      | 285 |
| 五木寛之と時代の青春  | さらばモスクワ愚連隊・戒厳令の夜 | 291 |
| 吉村昭と実録      | 戦艦武蔵・破獄          | 296 |
| 野坂昭如の意地     | アメリカひじき・火垂るの墓    | 305 |
| 陳舜臣と中国      | 青玉獅子香炉・残糸の曲      | 308 |
| 生島治郎の場合     | 黄土の奔流・追いつめる      | 313 |
| 城山三郎と企業小説   | 一步の距離・落日燃ゆ       | 318 |

## 新たな展望

- 筒井康隆のバロディ 筒井順慶・俗物図鑑 326
- 早乙女貢の史眼 僑人の檻・おけい 331
- 渡辺淳一の意図するもの 無影燈・花埋み 335
- 森村誠一の主題 超高層ホテル殺人事件 342
- 笹沢左保の歩み 木枯し紋次郎・詩人の家 345
- 井上ひさしの諷刺 手鎖心中・吉里吉里人 350
- 船山馨と歴史の中の女性 蘆火野・花と濤 355
- 田辺聖子と笑い すべっころんで・隼別王子の叛乱 362
- 綱淵謙錠における史観 斬・戊辰落日 366
- 藤沢周平と時代ロマン 暗殺の年輪・一茶 371
- 宮尾登美子の体験の拡がり 櫛・天璋院篤姫 377
- 津本陽と剣 深重の海・明治撃剣会 384
- 星新一とショート・ショート ポッコちゃん 388
- 小松左京とSF世界 日本アパッチ族・日本沈没 390
- 阿刀田高とブラック・ユーモア 冷蔵庫より愛をこめて・ナポレオン狂 398
- 半村良と伝奇SF 石の血脈・産霊山秘録 394

胡桃沢耕史の変転

あとがき

412

黒パン俘虜記

407

卷末付録

人名索引

449

書名作品名索引

新聞雑誌等索引

事項その他索引

418 421 436

初出一覧

415

大衆文学の歴史

下

戦後篇



大衆文学における「戦後」

## 大衆文学における「戦後」

### 一

「——戦争が終ったら、万歳！ 万歳！ といって銀座通りを駆け廻りたい、そういった人があったものだが。私もまた銀座へ出て、知らない人でもなんでも手を握り合い、抱き合いたい、そういったものだが。」

『僕は汁粉を思いきり食うんだ。……』

新女苑の清水君の言葉が思い出される。間もなく彼は兵隊に取られた。いまだどこにいるか。

銀座は真暗だった。廃墟だった。

汁粉など食わせるところは、どこもない」

高見順がこう書いたのは八月十四日であった。そしてその翌日は書いている。

「——遂に敗けたのだ。戦いに破れたのだ。」

夏の太陽がカッコと燃えている。眼に痛い光線。烈日の下に敗戦を知らされた。

蟬がしきりと鳴いている。音はそれだけだ。静かだ」

いわゆる玉音放送のあと、日本の焦土には一瞬の沈黙が来たようだ。蟬しぐれだけがやかましく、「敗戦」はそのとき一般に「終戦」として意識されていたにちがいない。この瞬間の表情は、戦後二十年の歴史をそのまま象徴しているようで、とくに戦争を「敗戦」として実感できなかった主体の喪失が、みせかけの繁栄の底でジリジリとこげつく様相を、今にいたるもしめしつづけている。

高見順の日記に対応させてもう一つ別の記録を引いてみよう。科学小説作家だった海野十三の敗戦の日の日記だ。

「○今夜一同死ぬつもりなりしが、忙しくてすっかり疲れ、家族一同ゆっくりと顔見合すいとまもなし。よって明日は最後の団欒してから、夜に入りて死のうと思ひたり。」

くたくたになりて眠る」

海野十三が一家心中を決意したのは八月十二、三日ごろのこと。橋本哲男の記載「八月十五日前後」(『日本』昭和40・7)によると、海軍報道班員として国民の戦意昂揚に協力し、作家としては軍事科学小説を執筆したことの責任を感じたのが原因だというが、彼は戦争にたいしてかならずしも肯定的な態度をとっていたわけではなかった。むしろ批判的だったにもかかわらず、時流に抗しきれず、そう

いった事態に立ち到ったことに、人一倍強い自責を感じたのであろう。一つには彼の胸部疾患が進行していたことも条件として考えておく必要がある。だが一家心中を決意するその決意のしかたに、私はある種の心情的な傾向を窺むのだ。

大衆作家の個々人が、八月十五日をどう受けとめたかは、大衆文学の戦中と戦後をむすぶ結節点となる。彼らのなかにある連続あるいは断絶の意識が、分析されることによって、それまでの大衆文学が内にはらんでいた弱さがある程度解明されるはずなのだが、ここではその問題に詳しくふみとどまっている余裕がない。

戦争恐怖による初老性の憂鬱症と診断された海軍作家、日夜憤激して、きげんが悪く、戦争がすめばすんだで、おこつてばかりいた時代作家、突然自失のまま無為に日を送る協力作家などのなかで意外に死を決意したものが少なくない。鹿屋の特攻基地に報道班員として配属されていた山岡莊八などその典型であらう。彼は生涯で二度も大きなショックを受けたことがあったという。

「その一つは完全に自殺を遂行したつもりで生き返ったとき。そしてもう一つは日本中に終戦の詔勅が放送されたときだ。この方はもう負ける……もう負けると思っていたのだからホッとしそうなものであったが結果は逆であった。二十一歳の時に自殺したはずの私が、三十九歳まで生き伸びたのは、こんなことを経験させるためだったのかと思つたときに、さっぱりこの世がいやになった。しかしその

時、改めて自殺し直そうとする私に、そのまま持っていては都合のわるい荷物が一つあった」

それは山岡が出撃する特攻隊員からあずかった署名簿のことだ。考えぬいたすえ、師にあたる長谷川伸をたずね、さり気なく遺品や帳面を置いて帰ろうとすると、遺品を手箱に、帳面をふくさにそれぞれ包んで「君の一生はこれからこの中にある精神を生かすのだね」といわれたそう。このことが追放中『徳川家康』の執筆を発意する動機ともなるのだが、それについてはしばらくおくとして、ここに語られた敗戦時の心境は、海野ほど直接的ではないにしろ「自殺」を思い立ったことに変りはあるまい。ただ海野と山岡では「自殺」を思い立つまでの主体の位置がことなる。みづから戦争責任を自覚したことで一家心中を決意したケースと、この世がいやになってなんとなく死を思いえがくのでは、死へ向う立場がちやうど逆になる。つまり山岡は戦争の責任を感じる側にはいなくて、被害者の位置に立とうとしているのだ。私はここにも海野とは別の意味での心情的な匂いを感じる。もう一言つけくわえていえば、山岡をさとした長谷川伸の「君の一生はこれからこの中にある精神を生かすのだね」という言葉のなかに、作家としてのきびしい生き方を教えられるのだ。

長谷川伸は後進にさがけて、戦火がたびたび東京を襲つたころすでに、戦後を見透す仕事をはじめていた。『日本捕虜志』の労作である。彼は『日本敵討ち研究』の草稿とあわせて、空襲のサイレンを聞いたたびに土中に埋め、解

除とともに掘り出す操作を敗色の加わる東都の一隅でくりかえした。『日本捕虜志』の序文によると、「この本は昭和六戦の後期に入り、日本全土が火と鉄との直接攻撃で、地獄の惨害に陥ったとき着手、日本が降伏したその日までに、事実の聚集漸く半を超え、草稿は約四百枚になっていた」という。執筆の意図は「日本に関する捕虜に就て、世界無比の史実を闡明し、どの程度かは知らず残存する日本人の間に、語り継ぐべき資料を遺さん」とすることにある。彼はたとえ戦火によって地上のものが焼きつくされることがあっても、地中のものはいつか掘返されるときがある。万一日本が敗れる日が来ても、だれかがこの未完の稿本を発見し、継承発展させてくれるだろうと信じた。信じたというより念じたと表現すべきだろうか。

白村江の戦いで日本の大敗北から日露戦にいたる歴史の影の部分をつとめながら、長谷川伸がその行間にこめた祈りは戦火をこえ、国境をこえて次代に語りのこそうとした日本人の誇りであった。彼は戦中であって、戦後をある部分では見とおしていた。八月十五日は、彼の決意をさらに強固にすることはあっても、そこに断絶はみられない。戦争下の調査を（それを支えた意識を）当時の文献で裏付けられないのは残念だが、しかし戦争中に発表した作品「捕虜さまさま」（「オール讀物」昭14・9）や「俘虜」（「改造」昭16・9）などによっても、ある程度指向するものは読みとれる。「戦陣訓」の〈本訓〉其の二第八には「名を惜しむ」と題して、「恥を知る者は強し。常に郷党家門の

面目を思ひ、愈々奮励して其の期待に答ふべし。生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」とある。これは忠節をつくし、信義を重んずることを強いられた日本の兵隊を意識下で縛った禁忌であった。

「生きて虜囚の辱を受けず」の一項が權威をもっていた時代に、捕虜志の構想を抱くことは「非国民」的行動であつたらう。それを百も承知で長谷川伸は戦後のために、敢えて行つたのだ。「日本捕虜志」は昭和二十四年五月から一年余にわたって雑誌「大衆文芸」に連載された。第二次大戦で戦犯としてとらえられた日本人は約一万名、そのうち有罪の判決を宣せられた者は四千名に近かつたという。戦後あらためて筆を取った長谷川伸の胸中には、南方諸地域で服役、あるいは刑の執行を待つB・C級戦犯や、遠くシベリヤの僻地で労役にしがう同胞の苦難を思いやる心がうずいていたにちがいない。彼は戦中とは別の角度から日本の捕虜志を——日本人は捕虜をどうあつかってきたか、また日本人捕虜はどうあつかわれてきたかを——書こうとしたのだ。

「日本捕虜志」の第一部が掲載された「大衆文芸」の昭和二十四年五月号後記によると、「すべての執筆を絶って、全力を傾注すること実に半歳にわたって完成した一大労作」と書かれている。このことから逆算すると、さいごの執筆にかかったのは、東京裁判の判決が行われた昭和二十三年十一月十二日前後だったと想像される。だが長谷川伸の眼は、七人の戦犯に向けられたものではなく、むしろ異

境にあってロクな裁判も受けることなく服役している多くの無名の戦犯に向っていた。いや、彼らが処刑されるのを黙って見送っている骨抜きになった日本人に向けられていた。彼の考えのなかに戦争責任と戦争裁判にたいする意識がどう位置していたか明瞭ではない。主要なことは彼が戦中からすでにその想を練っていた点である。「日本捕虜志」の冒頭に「法句経」の文句、「他人のことを作し、かれの作さざるを觀る勿<sup>なほ</sup>」を引いているところから作者の心象を忖度すれば、みずから被告席にすえて、仰角で歴史をとらえた庶民の作家長谷川伸の信条の吐露とみなすことも可能だろう。彼は捕虜の問題をぜったいに高みから俯瞰してはいない。歴史の被告席におかれた捕虜と同じ位置に座して問題を反芻<sup>はんそう</sup>している。

「日本捕虜志」には姉妹篇ともみなすべき「印度洋の常陸丸」が別にある。第一次大戦中（大6・7）にインド洋でドイツの仮装巡洋艦ウォルフ号に襲撃され、抑留された常陸丸（日本郵船の欧州航路定期船）の乗客および乗組員が、捕虜生活一年十ヵ月で帰国するまでの記録だが、「日本捕虜志」の記載とは形をかえ、小説ふうな結構をそなえている。作者は、知人のひとりから偶然その体験を聞き出し、はじめて歴史のベールを開く気になったという。乗組員のひとりだった末次内蔵一は甲板部員、当時はまだ二十歳代の若さだった。その彼は「私も明治生れの人間で、捕われ者という一種のヒケ目を大いに感ずる一人で、あまり

人の中で話をしたくないので、先生にもこのことは今まで黙っていました」と長谷川伸に告白している。

「捕われ者という一種のヒケ目」は、「生きて虜囚の辱を受けず」と同様、天皇制国家が培った戒律に基づくものだった。長谷川伸の創作意図の底には、捕虜志をまとめることで日本人としての誇りをよびさますと同時に、「捕われ者という一種のヒケ目」をも解消してゆく庶民的な抵抗感とでもいったものが動いていることを見落してはならない。戦場で血と汗を流すのも、虜囚となって苦しむのもいずれも大衆なのだ。長谷川伸は「日本捕虜志」の後記を「この本は捕虜のことのみを書いているのではない、日本人の中の日本人」を、この中から読みとっていただきたい」と結んでいたが、彼が呼びかけた読者は、その大衆、つまり戦場で闘い、傷つき、あるいは捕虜の苦しみを味わいながら生きてゆく大衆を指すわけであった。

## 二

大衆雑誌に連載中の長篇（あるいは連作）もので、敗戦により中絶された作品と、そうでないものとを比較することは、状況の変化を、ある程度測るバロメーターとなる。

昭和二十年三月、企業整備により婦人誌は「主婦之友」「婦人倶楽部」「新女苑」の三誌となった。

「主婦之友」は昭和十九年二月にはじまった「一号倶楽

部」(獅子文六)が敗戦後の二十年九・十月合併号までつづき、以後二十一年いっぱいまで読切短篇が、一ないし二本掲載される。この雑誌は比較的敗戦による筆者の変動が少ないほうで、獅子、堤千代、藤沢桓夫などのレギュラー・メンバーが執筆、数年のあいだ影をひそめていた石坂洋次郎が八月を境にカムバックしてくるのに対して、吉川英治、吉屋信子などが去り、戦中・戦後交替の相をわずかにあらわしているようだ。「婦人倶楽部」は山本周五郎の代表作「日本婦道記」を、昭和十七年六月の「松の花」からひきつづき、敗戦の年の最終号十一・十二月合併号の「生き甲斐」まで読切連載。八・九月合併号には「文鎮」を発表している。ここでも現代ものの筆者にはとり立てて変化はない。牧野吉晴、小糸のぶ、大林清などだ。ただ二十一年になると、時代小説は山本周五郎「日本婦道記」の完結とともに姿をけし、かわって芹沢光治良らが登場する。「新女苑」は二十年一月から翌年三月まで大佛次郎の「からふね物語」(源実朝)の続篇)を連載、石川達三、丹羽文雄らの短篇が、戦後になると毎号掲載されはじめる。なお雑誌の統廃合いらい休刊していた「婦人画報」(昭20・10)、「婦人公論」(昭21・4)の復刊、「女性」(昭21・4)、「婦人文庫」(昭21・5)、「新婦人」(昭21・5)などの新顔も顔をそろえる。もっとも戦後一、二年のあいだに創・復刊された婦人雑誌は四十数種あり、空前のブームといえよう。

つぎに大衆綜合誌(当時のことばでは国民大衆誌)をみ

ると、昭和十八年三月号から「富士」と改題した「キング」には、二年余にわたって山岡莊八「御盾」、尾崎士郎「高杉晋作」が連載されていたが、八月当時はすでに長篇もおわり、五・六月合併号では「十人一殺論」とか「防空戦闘生活の要点・地下生活の構想」に並んで村雨退二郎「主膳と四郎左」、房內幸成「明日香風」が掲載されているにすぎない。それが八・九月号になると、いきなり西村展蔵「道義日本の建設」と変り、房内の随想「昭和の御一新」が違和感をのこして一隅を占めている。小説は土師清二「いも地蔵」に長谷川伸「蛤町の孝助」の二短篇だ。「富士」からふたたび「キング」へもどるのは昭和二十一年一月、三年ぶりの復活である。「キング」が敵性語だとして槍玉に上がったのは十七年の十二月。新聞とラジオが先鞭をつけ、情報局で問題となった。その復刊号の巻頭には鈴木茂三郎が「産業民主主義とは何か」を執筆、組合などの民主的なあり方を解説し、舟橋聖一が「横になった令嬢」を書き出しているのも画期的だ。おそらく講談社の大衆雑誌に純文学作家の作品が登場したのはじまりではないか(木村毅はこの号に「マッカーサー元帥」を書いていた)。

「日の出」は、二十年に入って富田常雄の「気骨」を三回連載したほか、いずれも短篇、昭和二十一年一月二十日付をもって廃刊に決し、一年余を経て「小説新潮」となって戦後の中間小説開幕に資した。「講談倶楽部」は七月号に鳴山草平、北町一郎、納言恭平(奥村五十嵐)をならべ、八・九月合併号では長谷川伸「勘八男一匹」を掲載、時代